兵庫県大会最優秀賞
（中央大会　奨励賞）

ごめんねなんて言わせない

尼崎市立小田北中学校　一年　小助川　慶一

　僕には、姉弟で仲良くしている友達がいる。もともとは姉同士が仲良くなり、両方に弟がいたので、一緒に遊びだした。姉達の中学、高校がちがっても、変わらず姉弟同士で仲良くしている。ちょっとだけ変わっていることは姉の友達は車いすに乗っているということだ。四人の中で一番明るく、のんびりしている僕たち姉弟は、ぼんやりしていると置いていかれそうになりあわてて追いかける。そんな姉の友達を僕たちは「隊長」と呼んでいる。車いすに乗る隊長を一番前に、隊長の弟、姉、僕の順で笑いながら隊列が進むのはずっと変わらない。

　この夏休み、僕たちは子どもたちだけでご飯を食べに行った。みんなでお店を回ったりスパゲティを食べたりした。みんなでいた時間はとにかく楽しかった。一緒にいる時、隊長は一番年下の僕に

「大丈夫？歩かせてばっかりでごめんね、しんどくない？」

と何度も声をかけてくれた。お店回りの時、僕が、隊長の横を通ろうとしたら、姉が僕を引っぱって止めた。急に止まった僕に隊長が

「ごめんね慶君。」

と言ってくれた。

　その日の帰り道、

「なんで止めたかわかる？」

と、姉に聞かれた。僕は全く思い当たらなかった。

「横に並んじゃったら車いすが通られへんやろ。気付かんかった？慶一ももう大きくなったんやから、隊長にごめんなさいと言わせないようにするためにはどうすればいいか考えてみいひん？」

　僕は楽しかった今日を振り返ってみた。隊長の弟は、隊長が車いすを自分で動かせない時、車いすを押していた。他にも、隊長は高い場所にある物が取りにくいので、隊長の弟君が取っていた。スパゲティを食べに行った時も、隊長は車いすを片づけることができないから、隊長の弟君がじゃまにならない場所に車いすをたたんで置いていた。僕の姉は、物をどけたり、とびらを先に開けたり、エレベーターのボタンを先に押したり、隊長ががんばってもできにくい事をしていた。それらの行動を二人はさりげなくやっていたので、僕は全く気付かなかった。隊長も

「ありがとう、ごめん。」

を言っていなかった。それぐらいみんなが、自然だったのだ。

「隊長の車いすはありがとうや、ごめんなさいを言わせる道具じゃないんだよ。」

と姉は言った。

「隊長は私にない力をたくさん持っているんだよ。だから一緒にいてとても楽しいんだ。ただ、誰かの手を必要とする場面が私より少し多いだけだよ。一人で乗りこえようとしている事があった時は、最後まで力を貸さず待っていようね。それで、隊長ができるかどうかを、そばにいて見極める事が大事だよ。」

　「バリアフリー」、それは、体の不自由な人やお年寄り、小さな子どもの立場を理解して、生活をしていく上での、さまたげをなくそうという考え方や取り組みを言う。建物や道路や施設には、まだまだみんなが使いにくい物がたくさんあると思う。

　これまで僕はそんなことを考えたことなんて一回もなかったけど、使いにくい物を見極める視点を持ち、そして困ることが考えられる場合は、さりげなく力を貸すことができたら、僕自身がバリアフリーな人間になれる。そうしたら、みんなが笑顔で過ごせると思う。

　さらにみんながバリアフリーな人間になれば、体の不自由な人やお年寄り、小さな子どもが、もっと遠くへ出かける事ができるようになると思う。

　「隊長、次はもっと遠くへ遊びに行きましょう。また会う日を楽しみに待っています。」